

## 「最強寒波」の接近で

今朝は、たくさん子どもたちが雪玉を持って登校してきました。中には、「校長先生にあげる。」という子がいて、もらった雪玉でミニ雪だるまを作りました。雪が少ない長崎の子どもたちにとっては、今日の積雪でも貴重な雪遊びの機会になります。

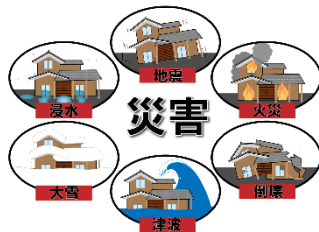


さて、標題の言葉は、日本気象協会の防災情報で2月2日～4日の夕方ぐらいまで使われていました。以降は、「警報級の大雪・暴風雪」となり、5日になって「大雪・暴風雪に厳重警戒」と変わっていきました。情報を発信する側としては、警戒意識を喚起するために初期段階では大きな括り（マクロの視点）で最も影響を受けやすい場合を想定します。（影響を小さく伝えて大きな被害が起こったときに叩かれるのを避ける意味合いもあると思いますが・・・）受け手側は、そのメッセージは読み取りつつも、情報の変化や身近な（ミクロの視点）状況把握に気を配って判断する必要があります。



これらは、正に今後の情報化社会の中で生き抜くために子どもたちが身に付けておかねばならない態度だと考えます。もちろん判断が正しい場合もあればそうでない場合もあります。間違っていたら、自分の情報の受け取りがどこで良くなかったのかを分析し、次に生かせば良いのです。センセーショナルな表現がとかく多くなった世の中で、冷静に情報の収集と分析ができる受け手が育つような働きかけをしていきましょう。

話は少し変わりますが、以前の学校で「長与町は自然災害発生の可能性があればすぐ臨時休業（休校）と判断するのに、なぜ長崎市はそれをしないのですか。」という質問を受けたことがあります。実際に今回の大雪の予報が出た際も、長与町や時津町はすぐに5日の臨時休業（休校）を決めました。長崎市立小中学校は、前日判断はせず、朝の積雪状況をふまえて各学校で判断するというスタンスでした。



これは、①基本的に積雪は、台風や大雨と違って危険と直結しているものではない（外に出ること自体が危険だとは言えない）②長崎市は東西南北に広がっていて、雪の降り方が場所によって大きく違う③学校所在地の土地環境によっても積雪量や登下校の安全性が違う等の理由からです。校長としてそのとおりだと納得しています。

もう一つ言えるのは、「前提として、登下校の安全管理責任は保護者である」ということです。上に書いたように、外に出ること自体が危険ではないが、各家庭の立地によって登下校の安全性が違うので、そこは保護者の判断に委ねるのが筋だからです。この点もそうだと考えます。

明日までは「大雪・暴風雪に厳重警戒」となっています。学校の判断と保護者の皆様の判断で、子どもたちの安全をしっかりと確保しましょう。

